

中田かわら版 10月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

■フレッシュフルーツ・モリ 森 雅則さん (54) に聞く

「浜なし」が美味しいわけ 宮田 貞夫

先人たちのご苦労があった！



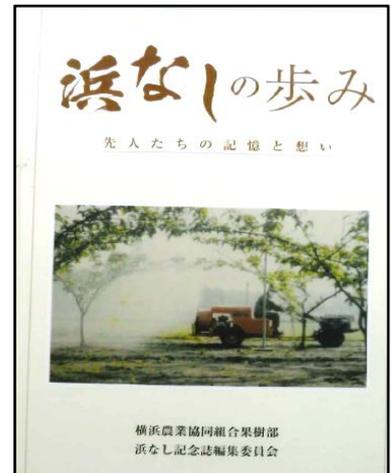
今年も待望の「浜なし」の季節がやってきた。私たちは、それをただ美味しいと思う前に、そこには商品を提供する生産者のご苦労があるはずだ。地元（中田南）で梨づくり 20 年の森 雅則さん＝写真左＝に取材を申し込むと快く引き受けてくれた。「よかったら和泉町の方の新農園を紹介しますよ」。現在の場所は老木化して樹勢も弱くなってきている。来年（令和 7 年）で全面改植の予定だと、森さんの説明。平成 24 年、現在地に 2000 平方メートルの代替地を確保して約 10 年、今では立派な梨棚になっている。この日（7 月 29 日）、訪れた時はあと 2 週間ほどで色つやもよく大玉の完熟した「浜なし」が収穫できるという。

それにしても梨栽培の苦労はいろいろあるが、重要なのが摘蕾（無駄な花のつぼみ落とす）→受粉→摘果作業。さらに専用の木から受粉に必要な花粉を精製するために花を採取することが重要。その他天候や収穫時になると害敵（ハクビシンや病害虫など）の心配も増える。収穫までには多くの熟練した人たちの努力が支えていることがよく分かった。

「浜なし」の特徴は良食味と共に大玉産があげられる。「幸水」に代表されるように表面がざらざらして甘みがあり食感が抜群。「豊水」「新水」「菊水」など種類も多くなり、徐々に有名になってきた。昭和 60 年、「かながわの名産 100 選」、平成 9 年に横浜ブランド農産物に。平成 27 年に待望の「商標登録証」が認定された。ここにたどり着くまでには多くの生産者の血のにじむような研究と努力があった。ブランドになると今度は商品の厳格な基準のもと販売される。「だから」と、森さんは「いつでも安心安全で味のいい完熟した梨を食べていただけます」。

横浜の梨という意味で「浜なし」の歴史をたどると、先駆的役割を果たしたのが下飯田町本郷の小菅家と言われている。昭和 16 年（1941 年）、小菅家が桃と梨の試作品を植えたが戦争で中断。戦後、平塚の「農事試験所」の指導で「長十郎」（梨）の栽培に力を注いだが病虫害や対応する農薬もなく挫折の繰り返し。以後その土地にあった梨の品種改良が待たれた。昭和 40 年（1965 年）代に入って三水とよばれる「新水」「幸水」「豊水」などの新種が導入され需要が増えると共に生産も高まってきた。多年の教訓から「浜なし」は市場出荷はせず直売方式が特徴で品質の良さが裏付けされている。

最後に森さんの印象的な言葉が。「梨は追熟しません。枝上で完熟し高糖度となった梨を早朝採果して店頭に出すよう気を遣っています。ぜひ、皆さんに浜なしの魅力、美味しさを十分味わってください」。なお中田には 6 か所の梨農園がありブランド「浜なし」づくりに貢献している。



<参考資料>

- ・『浜なしの歩み』（先人たちの記憶と想い） 横浜農業協同組合果樹部・浜なし記念誌編集委員会
- ・『学研の図鑑』（植物のくらし） 学習研究社

■私たちの町を上空から撮影

「あやめ日報」のドローン・プロジェクトが始動！

泉区の地域情報を X（旧ツイッター）や Instagram などの SNS で発信し泉区の魅力を伝えているメディア「あやめ日報」が 8 月 19 日、地域の様子を上から撮影する「ドローン・プロジェクト」をスタートさせた。泉郵便局の近くのビニールハウスなどで花卉栽培に取り組む「フラワーアーク」（社会福祉法人「開く会」、中江博章所長）の敷地から、あやめ日報のメンバーらがドローンを飛ばし、上空約 145 メートルまでの位置のカメラから泉区の 360 度の眺めを映像に収めた。上空から撮影した映像は、「中田駅」などポイントになる場所に説明を付けるなどして編集、ネット上で誰もがみられるようにアップしている。



（ドローンの映像を紹介したあやめ日報の X の QR コードから、まずはご覧ください）



ドローンを飛ばす「あやめ日報」のメンバー



あやめ日報の X

住んでいる街の様子を上空から捉えると、普段は気付かない街の魅力を発見できることから、ドローンを持っている「あやめ日報」のメンバーらが今後、区内の各地からドローンを飛ばして撮影をする取り組みを進める計画。上空からの映像を見ることで防災や防犯、地域の安全など街づくりを考えるきっかけにもしたいと考えている。ドローン映像の活用は地域の魅力を自由な視点でとらえることができそうだ。



今回の飛行拠点となった「フラワーアーク」では、上空から花を育てている様子なども撮影しており、その映像を自分たちのホームページにアップして PR 活動に利用する予定だ。同様に、「私の地域でもドローンを飛ばして上空からの撮影をしたい」という要望があれば、安全面などを確認しながら具体化し、要望を実現したいという。「あやめ日報」メンバーらは「いつも見るのとは違う視点から地域の様子を見ることで、さまざまな発見がある。その発見を映像とともに発信することで、地域の魅力がさらに掘り起こせるはずだ」と、これからのドローン・プロジェクトの効果に期待を込める。（鈴木賀津彦）

編集後記

泉区の情報で 3D キャラクターの「あやめ」が SNS で発信している「あやめ日報」をご存じでしたか？映像を使って誰もがネットで地域情報を発信できる時代のローカル・メディアを、一緒につくっていきたいですね。ドローンで映像を撮ってみたいなど、問い合わせは鈴木=suzukikatsuhiko514@gmail.com=まで。（鈴）

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本正

編集委員：山木重樹、小島敏子、田中進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋 宏之